

第二回 ふるさと絵図に向けた聞き書き会

日時：平成27年11月22日、23日

協力者：鍋家さん（上の平区）

黒川市場女性グループ 5名

上延さん（山女原区）

安村武一さん（黒滝区）

服部喜久典さん（大宮神社）

山内自治振興会、山内地域市民センター やまびこ文化祭

奈良教育大学「グローバル人材育成を見据えたESDコンソーシアムの構築とユネスコスクール間交流によるESDの推進－国際（Think global）と国内（Act local）の融合－事業として、学生・教員8名が参加

①N氏（於：N氏自宅）

N氏は昭和14年生まれの77歳である。上の平地区で農業を営むとともに、地域の民俗文化等を研究されている。鍋家氏のお宅にあらせていただき、囲炉裏の火を囲みながら傾聴した。鍋家氏の話は農業から食、伝統行事と幅広いものであったが、それぞれにおいて自然への畏怖の大切さを訴えられていたように思われる。

農業を継続的に営むためには、自然を理解し自然に従っていくことが肝要であり、昔の人の知恵が大変役に立つ。昔の人は自然に逆らわないように自然を利用していた。お金儲けでやろうとすると、自然に対する負荷が大きくなり、長続きしない。自然との共生ではなく、自然に生かされているというのが本当である。

昔の人の知恵は暮らしのいたるところにある。箱膳には、食を通じた命の教えがあり、自己責任を教えてくれる。昔の人は食べ物を粗末にしなかった。残菜はウシやニワトリ、コイの餌に「おさめた」。

そのウシを使って農業を営み、ニワトリやコイから食を得ていた。食べ物を粗末にすることは命を粗末にすることだ。

昔は水も大切に使った。山内はもともと両墓制の風習があった。両墓制とは、埋め墓と参り墓の2つを造る風習だ。埋め墓は高い山に造った。山中他界観である。祖先は山で水分（みくまり）の神になると信じられていた。

山内には「大飯講」「餅講」「蕎麦講」があった。いずれも年に1回は腹いっぱい食べることで幸せを感じるものであった。大飯講では、村田である「大飯田」で育てた米を



一人8合ずつ食べさせた。それだけ、普段は食べるができなかったということだろう。

本当に百姓をしないと、行事の意味はわからない。行事は人が生きていくという事を教えてくれる。温故知新である。例えば1月7日に行う「山の神」では、当家は2本のクリの枝を探したのだが、それは男女の交合を表したもので、子孫の繁栄を祈願したものだった。山女原



(あけびはら)では「おこない」がされており、それは地区に悪いものが入ってこないようにする「結界」だ。行事はひとつひとつ意味がある。最近はいノシシやシカ、サルによる農業被害が喧伝されているが、かつてはオオカミが農業の神で、オオカミの遠吠えがあれば、オオカミのお産であるとしてそちらの方に赤飯を供えた。虫送り、虫供養などには日本人のやさしさがあるように思う。伝統行事には正解も間違いもない。その土地で間に合うもので続けていくことに意味がある。

さすがの、山内民俗学の博士・・・、箱膳の話は、子どもたちや若い世代も聞き、自然とのかかわりを考えて行きたいです。

②黒川市場の高齢婦人からの聞き取り

黒川市場は黒川地区の中でもかつてお店が多かったところのようである。この地区に住む昭和8年～12年生まれの5名の方に集まっていたき、「暮らし」をテーマに語っていただきました。



戦争中は、家族が多いほうが表彰されていた。今回集まっていたいただいた方々も、7人兄弟の方が2名、6人・5人・3人がそれぞれ1名ということで、毎朝5時に起きて、3升の米を薪で炊いていた。

1歳の誕生日には1升の餅を唐草の風呂敷に包んで、赤ちゃんに背負わせ、みの中で火吹きだけを杖にして立たせるとい風習があった。一生、食べ物に困らないようにという願いの表れだろう。田んぼでドジョウやタニシをとったり、川でモンドリを使ってウナギを捕ったり、井戸や川の水を汲んだり、幼い兄弟のめんどうを見たりと、子どもにも大切な役割があった。3歳の妹をつれて、小学校に通っていた。

靴は配給制のためなかなか手に入らず、学校から家に帰るとわら打ちをして、わらぞうりを自分で編んではいていた。でも、中学校に行くとならぞうりはわらのゴミがでるからという理由で禁止されてしまった。

イナゴを捕って学校に持って行った。粉にして出汁にでもしていたんじゃないか。当

時のおやつは、いも団子（鬼団子）、おかき、流し焼き、キュウリ、イタドリなどだった。どの家でもニワトリを5～20羽飼っており、兄弟で順番に卵を食べたものだった。乳をとるためにヤギを飼っている家もあった。

学校は面白くなかった。消しゴムのかわりにツバで消すのだが、ノートの代わりにしたわら半紙はすぐに破れて困った。中学校まで遠かったので、行きは兄弟で自転車の二人乗りで行き、帰りはトラックの荷台にぶら下がり帰ってきた。

とても、にぎやかに楽しく昔話をされている女性たち、70年を生き抜いてきたたくましさと温かさを感じました。



③U氏（山女原（あけびはら）地区）

U氏は、昭和3年に大津阪本で生まれ、2歳のときに山女原地区に移住し、母を助けて農業を営み、15歳で沼津の海軍工作学校へ入隊、終戦直前に岸和田の軍需工場に配属され、そこで終戦を迎える。その後帰村し、25歳までは農業を営まれ、それ以降は木材加工工場で働く。

山女原地区には太鼓踊りが伝えられており、U氏も中学校1～2年生の頃に「面」を担当し、その後「貝吹き」2年、「太鼓打ち」を5年、「歌出し」を10年と、長らく伝統行事に携わられた。しかし、2年前にせめてビデオに残すためにプロジェクトが実施されたが、この山女原地区の太鼓踊りはもう伝わっていない。

父が早く他界したため、小学校3年生から農業に従事し、忙しい時は小学校も午後から早退させてもらっていた。5月になると、ウシを使って田起こし、代かきをした。シュロの木は根元から先まで同じ太さなので、田をならすのにちょうどいい。田植えでは8条～9条植えをしていた。稲刈りでは、脱穀、千羽こき、その後は木の小づちでたたいて、稲穂から実をとった。当時は力自慢の風習があり、米俵をかついで走る競争があった。今もお宮さんの前に力自慢の石が置いてある。

農家にとって牛は大切だった。貸付牛という制度があった。小さい牝牛を貸してもらった。雄牛は自由に売ることができたので現金収入になって助かった。餌は山の下草などをやっていた。冬はわらを与えた。



④Y氏（黒滝地区）

炭焼きについて教えてくださいとお願いすると、「炭焼きは自分よりもっと詳しい人がいるで」と恐縮されていましたが、語ってくださいました。

Y氏は祖父から炭焼きについて学び、生計を立ててきた。父親は、Y氏が19歳の時に戦死し、祖父が1年間で炭焼きを教えてくれた。

明治か大正から炭焼きを代々している。夏は百姓として農業か、木を切っていた。炭焼きは主に冬(農閑期?)に行った。季節によって値段は変動する。冬は高く、春は安かった。

・炭の作り方: 窯を組んで、原木を立てて詰めて、口で火を焚いて、炭化する。火を止める時期は煙の色で判断する。煙突の上に木を置いて、それが炭になったら、頃合い。煙突から空気の口を調節する。早くできたものは質が悪い。その調節が難しい。窯のふたをするときには水がいる。炭は火鉢などに使われていた。窯は後はあるが、もうない。窯の直径は8から9尺。子どものころは、冬休みは火待ちなどを手伝った。木を集めて、日の手入れをして、窯から焼けた炭を出して、原木を入れる手伝いをした。

- ・3日冷まして、その間に原木を切る
- ・焚くのは2日間ぐらい。
- ・1回で30~40俵の炭ができた。



・戦後、団塊の世代の人は炭焼きをしていない。
・現在は木が乱立しているので、スギ花粉がひどい。山火事のように火の粉が舞う。
等の様子を語っていただきました。
でも、今は若者が林業への関心が薄れ、山の木が荒れていることを残念に思うな。。。と。

他写真

(山内の風土にふれる)

